【分科会抄録】
演題「デジタル化の進展と研究者の情報入手および利用行動の変化」

原田 隆史
同志社大学免許資格課程センター　　教授
同志社大学大学院総合政策科学研究科　教授

近年のデジタル化の進展にともなって研究者を取り巻く情報環境は変化してきた。もう随分前から学術雑誌は電子ジャーナルの利用が当たり前になり，オープンアクセスで入手できる論文数も着実に増加している。また情報を探すというツールについても従来の書誌データベースだけではなく Google Scholar などが出現し盛んに使われるようになってきた。また従来は物理学などの一部の分野だけに限定されていたプレプリントの配布は人文社会科学分野でも普通の行動になっている。これを受けてインフォーマルな情報とフォーマルな情報の関係も大きく変わってきた。プレプリントや学会の予稿集などを引用することも普通の行動となり，これらの媒体に発表する目的もフィードバックを得ることから研究を早期に公開することに変わってきている。

このような状況で研究者の情報入手および利用行動にも変化が見られる。世界で生産される学術論文数が 2010 年から 2020 年の 10 年間で 2 倍にも増加したといわれる状況などもあり，自分か直接的に関わるものではない関連研究などについては，デジタル形態で入手できないものは読むことをあきらめる場合や抄録などで代用するケースも珍しくない。

入手した論文の利用という点でも，電子ファイルで入手した論文などを紙に印刷して読むのが大多数であった状況から，表示された画面を読む行動が着実に増加している。特に論文中の語を指定した検索や関連する情報に簡単に接続できる便利さを指摘する声は多く，また非英語圏では DeepL 翻訳, Google 翻訳などの機械翻訳なども情報を得るスピードアップにつながっている。さらに最近では ChatGPT をはじめとする生成系 AI の出現により，従来では簡単には行えなかった情報の整理などに使われるツールも充実してきた。ある意味で 1945 年に Vannever Bush が夢見た Memex のように大量の論文を自動的に処理する機械の時代が近づいてきたと言えるかもしれない。

一方で変わらないものも多い。たとえば研究者の図書館に対する期待は低下していない。継続的に行われている調査でも"Buyer", "Archive", "Gateway"としての図書館の活動に対する評価は多少の変動はあるものの高いままであり，オープンアクセスや Google Scholar などの発展があっても研究者の中で図書館の役割が低下したという声はほとんど見られない。またデジタル技術がいくら進歩しても対面でのインフォーマル・コミュニケーションの重要性を指摘する声も強い。本講演では ChatGPT のような生成系 AI の影響なども含め，研究者の情報行動で大きく変わった点と変わらない点の両面を織り交ぜて紹介する。